
シスター ～僕は妹が好きだ～

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シスター ～僕は妹が好きだ～

【Nコード】

N4895J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

何かというと、べたべたと付きまとってくる僕の可愛い妹、早苗。ある日、父親に、そんな早苗と僕が血の繋がっていない兄妹だという事実を打ち明けられ、その日から僕の早苗に対する接し方がガラリと変わる。

僕と早苗の関係が、ぎくしゃくとしたものに変わりつつあり、けれど、そんな時に早苗がある決意を口にする。

青春短編小説。

彼女の背中へと手を伸ばす。

待ってくれ、と。

しかし、彼女は聞こえないのか、ゆっくりと歩き出してしまふ。名前を呼ぶ。すると、彼女が振り向き、何か言葉をつぶやいた。小さな声で、とてもではないけれど聞き取ることではなかった。もう一度呼ぶ。すると、彼女はこちらを意識することなく顔を前へと向けて、そのまま歩き続ける。

だんだんと離れていく彼女の影。僕は必死に叫び続け、腕をさらに引き伸ばす。

やがて彼女の姿は暗闇の先へとかき消えてしまふ。

僕は思わず咆哮し、一層強く手を伸ばした。

やがて、その手が何かをつかみ取った。

意識が夢から覚めると、ふと声が聞こえた。

「お兄ちゃん。何、寝惚けてんの」

ふにふにと柔らかい感触が手の中にある。それをぎゅっと握ると、
「あつ……」とどこか妖艶な声が頭上から降ってくる。

目を開くと、見慣れた天井がそこにあった。ゆっくりと視線を下ろすと、妹の早苗の顔が間近に見えた。頬がほんのりと朱を帯び、その目はとろんとしている。

僕はさらに視線を下げる。そこには、僕の伸ばされた手と、つかみ取った早苗の隆起した丘がある。

「おわあっ！」

慌てて手を離すと、早苗は快感の余韻を残したような、恍惚とした表情を浮かべて、ふう、と吐息をついた。

「ご、ごめん！ 触るつもりはなくて——」

早苗はじつと僕の顔を見つめ、くすりと笑い、

「お母さんが、朝ごはんができたって呼んでるよ」

僕はいつも通りの様子にほっとしてうなずき、

「……今行くよ」

早苗は、その可愛い顔を微笑ませたまま、それでもじっと僕を見下ろしたままだ。

僕は苦笑しながら、「あの……」とつぶやく。

「どいてくれない？ このままじゃ起き上がれないよ」

早苗は、自分の足の下にある僕の腹を見下ろしてわざとらしく「あ」とつぶやき、

「あははっ。ごめんね、お兄ちゃん！」

早苗はにこつと笑みを見せつつ起き上がり、よいしょとベッドから飛び降りる。

いつものことなので、僕もベッドから体を起こし、気にせずに着替えを始める。

すると、早苗が戸口に立ったまま、こちらをじっと凝視していることに気付いた。僕は視線を、手元のワイシャツに落としたまま「早苗」と言う。

すると、彼女は残念そうな声で、「ううん、わかったよ」とつぶやき、部屋を出ていく。

ばたんと扉が閉まると、僕は「はあ」と溜息を吐く。

うちの早苗は、素直で良い子なんだけれど、常にべったりとしてきて、たとえば、登校する際は必ず一緒にいてくる。彼女は可愛いからよく目立ち、登校中の男子生徒の視線が集中する。

しかし、そんな奴らに対し、僕は目つきでこっ訴かけてやる。

うちの妹に手を出したら、ただじゃおかねえぞ、と。

思えば、早苗は小さい頃から僕に懐いていた。

でも、その慕い方が少し異常な気がする。

夜、眠っていると、こっそりベッドの中に入ってきたり、他の女の子と仲良くしているとさりげなくその女の子に嫌がらせをしたりする。

早苗は本当に困った子だけど、それでも僕は彼女が可愛くて仕方ないので、ついつい破天荒な振る舞いを許してしまうのだ。

自分でも、少しばかりシスコンだと自覚している。

僕は鏡を見ながらネクタイを締め終わると、「よし」と鞆を取り、ブレザーを羽織りながら部屋を出る。

階段を下りると、リビングからお母さんが顔を出し、「おはよう」と声をかけてくる。僕は鞆をソファアの上に置きながらそれに応じ、早苗の真向かいの席につく。

すると、

「……あーん」

いきなり早苗が箸で卵焼きをつかんで、僕の口の前に差し出してくる。僕はそのまま口を開ける。

彼女はちょこんと舌の上に卵焼きを置き、僕はそれをもぐもぐと噛み砕く。その様子を見て、早苗はにっこりと微笑む。

そこで、それまで黙って朝食を食べていた父さんが、「和彦」と口を挟んできた。

「何かな、父さん」

僕は味噌汁を飲みながらそうつぶやく。

「今日の夜、お前に大事な話がある」

「何の話？」

「その時に話す。とにかく大事な話だから」

そう、と僕はうなずき、気にした風もなく箸を進める。

そのまま朝食を摂り終わると、僕は鞆を取って、「行ってきます」とリビングを出て、外に向かった。すると、早苗がセーラー服の裾をなびかせながら追ってきて、僕の横に並んだ。

「良い天気だな」

空を見上げてぼつりとつぶやくと、早くも腕を絡ませてきた早苗が、「そうだね、お兄ちゃん。すごくカッコイイよ」と嬉しそうに関係ないことをつぶやく。

近所のおばさん達に挨拶しながら、僕は通学路を歩いていく。

そんな中、早苗がふとつぶやいた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何？」

「もし、お兄ちゃんが結婚できなかつたら、私がお嫁さんになってあげるね」

早苗は、そのささやかな胸のふくらみを僕の腕にこすりつけてきた。

「ああ。そうしてくれると助かる」

僕は彼女をなだめすかし、特に反応せず、てくてくと歩き続ける。その間、早苗は、にこにこにこにこ、こちらをじっと見つめてくる。

この熱心な視線は毎度のことなので、僕は別段気にしない。そのうち、ちらほらと登校する生徒の姿が見え始める。

彼らは、僕たちを仲の良いカップルとして見ているのか、どこか微笑ましそうに見つめてくる生徒もいれば、嫉妬のあまり半睨みしてくる人もいる。

僕は周囲の視線をあまり気にせずに、そのまま学校に着くと、下駄箱の前で早苗の方に振り返った。

「お兄ちゃん、それじゃあね」

僕のぬくもりを確かめるように、ぎゅっと腕を一握りしてくる。そして、ぱつと僕の腕を離し、くるりと体を回転させて後ろへと向き、もう一度「じゃあね」と言うと、上機嫌に下駄箱の奥へと消えていく。

僕は彼女の背中が見えなくなるまで見つめていたけれど、やがて一息を吐いて、歩き出した。

授業中、僕はうつらうつらしていた。真つ暗な背景に、ぽつんと浮かぶ人の姿。僕は彼女に向けて手を伸ばし、ある言葉を必死に叫んでいる。

——母さん、と。

国語の教師に、教科書で頭を殴られることによって目が覚めた。
僕は、教室内に響き渡る笑い声をぼんやり聞きながら、ふと思う。
何だろう、今の夢。

胸が締め付けられるような、それでいてどこか懐かしい感じがした。

あの女の人は誰だったのだろうか。あんな人、見覚えはないのだけ
れど。

見えたのは後ろ姿だけで、その顔はわからなかった。ロングの髪
と、その長身が印象的だった。

僕は先生の指示に従って、教科書のページをめくりながら、ふと
机の上に載っている一本のシャーペンに目が止まった。

赤い、チェック柄の入った、一見洒落たシャーペンだった。早苗
にもらったものだ。

僕はそれを手に取って弄びながら、早苗の笑顔をふと思い浮かべ、
——まあ、夢のことなんてどうでもいいか。

放課後。毎度のことながら、早苗が僕の教室を訪れて、お兄ちゃ
んと甘えるような、それでいて妖艶な声を教室に響かせ、僕は慌
てて席を立って、早苗の口を押さえに行く。

視線が僕と早苗に集中し、僕は顔を赤くしながら、慌てて教室か
ら早苗を連れ出した。

「お兄ちゃん、息ができないよ」

口を押さえられた早苗が、もごもご唇を動かせる。僕は、「ごめ
んね」と苦笑しながら彼女の口から手の平を離した。

「どうして教室に来たんだよ。下駄箱で待ってろって言っただろ」
別段責めるような口調でもなく、僕は優しく諭すように早苗へと
言う。

「だって。早くお兄ちゃんに会いたいと思ったら、勝手に足が動い
て……」

そう言って、僕が怒っているのかと疑るように、早苗は顔を覗き

込んでくる。

僕は、怒ってないよ、と笑い、

「今日の小テスト、どうだった？」

早苗が昨日、夕食の時に話していたから、ふと気になって聞いてみた。

「なんと、満点！」

早苗は得意げに胸を張ってみせる。

「そうか。よく頑張ったな」

早苗の頭を軽く撫で、「えへへ……」とにっこり笑う彼女を見ながら、もう高校一年生だし、いささか過保護すぎるかな、と思う。けれど、つつい甘やかしてしまう癖が僕にはある。まあ、気にしてないけれど。

家に帰り、早苗とゲームをしていると、そのままご飯時になった。僕らはリビングに集い、四人で食卓を囲む。

早苗のあくん、を三度味わった後、僕はごちそうさま、と席を立つ。

そこで、父さんが、「和彦」と僕を呼び止めた。

僕は振り向き、「そういえば、話があるんだっけ？」とつぶやく。

「……ああ。この後、ドライブに行かないか？」

その言葉に、僕は早苗と顔を見合わせる。夕食後、早苗とランプをして遊ぶ約束があった。高校生にもなってランプかよ、と笑われるような気もするが、僕と早苗のランプの技能は、一般人と比べて類をみないものがある。

それでもなにやら深刻そうな話だったから、僕は「わかった。……行くよ」と素直にうなずいた。

僕は父さんと共に、夜の繁華街を巡った。街灯の光の線が車内を規則的な間隔で通り過ぎていき、僕は助手席でそれを額で受け止めながら、まっすぐ前方を見つめていた。

ちらりと横目を向けると、それとほぼ同時に、父さんが「和彦」とつぶやいた。

「何？」

ぼつりと返すと、車が信号の前で停止した。

「父さんと母さんについての話だ」

「うん」

鼓動が早鐘を鳴らし始める。

「実は、父さんと母さんは——」

——二人とも再婚なんだ。

その言葉を、僕はじつと俯いて聞いていた。なんとなく、そのような言葉が来ることを予感していたのかもしれない。

顔を上げると、信号を睨んで、

「どうしてそれを今まで言わなかったんだ」

と言った。

「すまない。頃合いを図って、話そうと思っていたんだ」

父さんはうなだれながら、そうつぶやく。

「早苗は知っているのか？」

僕は低い声でそう聞く。

「今頃、母さんが話している頃だろう」

父さんは肩を震わせながらそう言った。

「……そう」

信号が青に変わり、父さんがアクセルを踏む。

「お前は父さんの連れ子で、早苗には母さんの血が流れている。…」

…お前と、早苗は血がつながっていないんだ」

それを聞いた途端、僕の心に何故か怒りが沸き起こってきて、僕は反射的に叫んでいた。

「それでも、早苗は僕の妹だ！」

その言葉を聞いた父さんが、目を見開いて肩を震わせ、そして、少しの間を置いて、

「もちろん、そうだ」

と小刻みに震えながら静かにうなずいた。

家に帰ってくると、早苗が玄関で出迎えてくれた。

「おかえり、お兄ちゃん」

につこりと、いつも通りの変わらぬ笑顔で、早苗はそう言うてる。僕は靴を脱ぎながら、「ただいま」と無機質な声で言うと、ちらりと早苗の後ろに佇む母さんを見た。

母さんは、どこか、影の差した笑顔で僕を見ていた。

この人は、僕の本当の母さんじゃない。僕の母さんは――。

一瞬、あの夢に出てきた女性の姿が頭に閃く。

僕は顔を伏せて、母さんの顔を視界から外すと、階段を駆け上がり、自分の部屋に向かった。

「お兄ちゃん！」

早苗の震える声が背中にかかってきて、僕は一瞬立ち止まったが、すぐに足を前へ踏み出して、部屋に入りドアを閉めた。

僕の体はすつぽりと白い布に覆われていて、父さんに体を抱きかえられていた。

父さんは僕を見下ろして、「良い子だね」と言っつて、左右に揺らしてくる。

僕は嬉しくなつて、彼に向かつてにぱつと笑つて見せる。

それを見て、父さんが「笑つた！」と嬉しそつに叫ぶ。

すると、父さんの隣に、母さんが立つてゐるのが見えた。彼女もその腕に赤ちゃんを抱えている。

僕はその顔を見て、ふと愛しさがこみあげてくることに気付いた。

……早苗だ。

彼女がぱつちりとした目をこちらにじつと向けてくる。

僕と早苗は見つめ合う。

鼓動が徐々に速くなつていく。

もつと近くからその顔を見たい。

彼女の微笑みに、胸が締め付けられる。

もつと、一緒にいたい。早苗と。これから、ずっと。

「お兄ちゃん」

ベッドの横から早苗の声が聞こえた。

振り向くと、同じ高さに彼女の顔があり、僕の寝惚け眼を丸い瞳が見つめ返してくる。

「おはよう」

僕はそつ返し、すぐに反対側へ顔を背けてしまふ。

そつして起き上がった、立ち尽くす早苗の横を通り過ぎ、そのまま彼女に言葉もかけずに着替えを始める。しかし、早苗が戸口で突つ立ったままであることに気付くと、

「早苗」

ぼつりと有無を言わせない声を彼女に投げかける。

すると、早苗は慌てて「ごめん！」と言って、部屋を出て行った。僕はそのまま着替えを続行する。

昨日、父さんがしてきたあの告白が気になって、どうしても、よく眠れなかった。それに、早苗の顔を直視できない。

僕と彼女は血の繋がらない兄妹で、そのことが彼女との間に溝を作ってしまうのではないかと僕は恐れていた。

——いや、違う。

一方的に溝を作ろうとしてるのは僕の方だ。

僕はきゅつとネクタイを締め、鞆を取って部屋を出た。

リビングに行くと、三人が食卓について、ぎこちない様子で朝食を摂っていた。

「おはよう、和彦」

「おはよう。冷めないうちに食べてね」

父さんと母さんの言葉に、僕はうなずくと、そのまま席に着く。向かいの席に座った早苗が、僕の顔をどこか心配そうな目で見つめてくる。

「お兄ちゃん、少し具合悪そうだけど……大丈夫？」

僕は視線を逸らして、無言で箸を手に取り、

「大丈夫だ。そんなこと、いちいち気にしないでいい」

すると、早苗は眉を下げ、俯いてしまった。

しかし、それを見た途端、何故か胸がきりきりと締め付けられ、僕は反射的に「でも、心配してくれてありがとな」と慌てて言葉を付け加える。

すると、彼女が顔を上げ、ぱつと笑みが浮かんだ。

それを見た途端——。

……やばい。

僕は慌てて視線をテーブルに落とし、自分の火照った頬を冷ますように冷水を煽り、どうしたんだよ僕は、と心中でつぶやく。

彼女を見ていると、どうして胸がこんなに苦しいんだ？

なんだよ、この感じ。

登校中、挙動不審な僕の様子に気付かず、早苗はいつものように接してこようとしていた。

僕は早苗に腕を触られる度に、びくつと体を震わせる。僕のその反応を見て、早苗は嫌がられていると思ったのか、手を引つ込めた。早苗に話しかけられても、うん、とか、そう、としか返さないの
で、早苗の表情も徐々に暗くなっていく。

そうしているうちに学校に着き、下駄箱の前まで来た。

「じゃあ、私いくよ」

僕は、ああ、とうなずくと、彼女に背を向けてすぐに歩き出す。
どうしても彼女と顔を合わせることができなかった。

背後で、早苗がぼつりと弱い声で、「お兄ちゃん」とつぶやいたような気がした。

放課後になった。けれど、早苗が教室に現れることはなかった。
どうしたのだろう、と疑問に思う反面、ほっとした気持ちが心を占めていた。

授業を受けている最中も、早苗の顔が頭にちらついて、うまく集中できなかった。

重症だと思う。いくら血が繋がっていないとはいえ、仮にも妹に
対して、こんな感情を抱くことは兄貴としてどうなんだろう。

それに、昨日の今日でどうしてもこんなに心が変化してしまったの
だろう。

氾濫する思考の波に、たまらなくなつて僕は唇を噛みながら、鞆
を手にとって教室を後にする。

玄関に行くと、早苗が僕のクラスの下駄箱の前で待っていた。僕
の姿を見た途端、早苗の表情がぱっと華やぎ、「お兄ちゃん！」と
手を振る。

「おう」

僕はおどおどした様子で、手を振り返し、上履きを脱いで靴に履き替える。

「お兄ちゃん、今日はHR長かったね」

早苗は、自分のブラウンの髪を揺らしながら笑ってそう言った。「教室に来るの、待ってたんだぞ」

すると、早苗は少し顔を俯かせ、「うん、ごめんね」とどこか元気なく答えた。

そんな彼女の表情を見て、僕の胸が、また締め付けられるように痛む。

僕は見ていられなくて、ぱつと彼女の手をつかむと、「ほら行くぞ」と腕を引いて歩き出す。

「お兄ちゃん……」

早苗が、弱弱しくぽつりとつぶやく。

無言でしばらく住宅街の道を歩いた。僕は意地を張るような、険しい顔をしていたに違いない。

「もういいよ。離して、お兄ちゃん」

そうぽつりと、早苗がつぶやいて立ち止まったので、手を離して振り向くと、彼女はにっこりと顔を微笑ませたまま僕を見ていた。その表情には、少し元気が戻っていて、僕はほっと安心した。

「心配してくれてるんだね。ありがとう」

突然そう言われて、僕は不意をつかれたように顔を赤くする。

「てつきりお兄ちゃんに嫌われちゃったのかと思ってた」

「僕が、早苗を……？」

それで元気がなかったのか、と僕は苦笑する。でも、確かに、今朝の挙動不審な様子は、そう思われても仕方がなかったかもしれない。

「私が本当の妹じゃないってわかって、お兄ちゃん、嫌になっちゃったんじゃないかって」

その言葉を聞いた途端、またいらだちが湧いてきて、僕は早苗の肩をつかみ、

「早苗は僕の妹だ。それは、ずっとこれからも変わらない」

彼女の目をじっと見て、そう言う。

早苗は、僕の勢いに、きょんとした顔を浮かべていたけれど、すぐに、「うん！」と大きくうなずいた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

そこで、早苗はあろうことが、僕の体に抱きついてきた。おい、それはいくらなんでも！

僕の首に手が回され、腰にもう片手が添えられる。僕の体はガタガタと震え出し、心臓がもう目が当てられないほどに騒ぎ出し、僕は唾をぐくりと飲み干す。

「お兄ちゃん、大好きだよ——」

愛しげなその言葉が、僕の耳に流れ込んでくる。僕はそっと早苗の背中に手を回した。

「ああ。僕も——愛してる」

ぽつりと、その言葉を口にする。早苗の体の動きがぴたと止まった。

その途端、密着していた早苗の体が突き離され、顔を真っ赤にして、たじろぐように見つめてくる。

「お、お兄ちゃん、今なんて——？」

「え？」

僕が首を傾げると、早苗はおどおどした様子で、口をぱくぱく開閉させ、

「よ、用事を思い出したわ。急いで帰らなくちゃ。またあとでね」

早口言葉を喋るように、豪速で言葉を並べ立てると、早苗はものすごい勢いで、走って行ってしまった。

僕は早苗の背中を見つめて、口をあんぐりと開けていたけれど、「僕、今変なこと言ったか？」と首を傾げる。

しかし、ふと自分の口にした言葉を思い出し、一気に僕の頭の中が沸騰した。

「……僕は、」

飯にも妹に対して、なんてことを言ってるんだ！ でも、早苗だって同じようなこと言ってたじゃないか。いや、彼女のは兄妹として好きって意味で、それはそれで少し残念だけど……って、僕何考えてんだ。

一人で身悶えしながら道の真ん中に立っていると、横を通り過ぎた生徒が訝しげにこちらを見てくる。

僕はどこかふらつく足取りで、その場を後にしたのだった。

夕食の最中、ふと顔を上げると、早苗も僕を見つめていて、目が合う。彼女は、箸でつまんでいた海老フライを落つことし、慌てて眼を逸らす。顔を真っ赤にして。

僕もなんとなく気恥ずかしくて、顔を俯かせながら食事を取る。いつも元気な早苗が、黙りこんでいるので、父さんと母さんが心配そうに彼女の顔を見つめている。昨日のこともあるからだろう。

僕はそんな二人のことを気遣って、さりげなく口を開く。

「あのさ、明日四人で外食でもどう？」

そうつぶやいてみた。

父さんと母さんも僕の気持ちに気付いたのか、話に乗ってきて、あっという間にその予定が確定した。

お前もいいだろ、と父さんが早苗に話を振ると、彼女はちらりとこっちを見て、その後で顔を綻ばせてうなずいた。

翌日、学校から帰ってくると、リビングのテーブルの上に、置手紙がしてあって、父さんと母さんは仕事で遅くなるから、僕と早苗の二人で行ってきなさい、とのことだった。

僕たちに気を遣ってくれたらしかった。

僕は階段を上がり、早苗の部屋のドアをノックした。

「早苗」

返事がないので、もう一度ノックすると、どこか緊張した声で、何？ と声が返ってきた。

「机の上のメモ、見たか？ 後で僕と一緒に行こう」

そう言つと、わずかに間があつて、

「わかった。今仕度する」

僕は自分の部屋に入り、私服に着替え、リビングで早苗を待っていた。

まもなく、階段を下りる音がして、早苗がリビングに姿を現した。彼女は、毛皮のついた白いコートを羽織り、下にはオレンジ色のセーターを着ていて、スカートを履いていた。

僕は、「おし、行こうか」とソファから立ち上がる。その時、ふと早苗のマフラーがずれていることに気付き、彼女に近寄ると、
「ほら……」

そう言つて、マフラーの向きを正す。僕の手が早苗の首筋に触れると、彼女がびくつとわずかに体を震わせた。

僕はそこでようやく早苗の顔が間近にあることに気付いて、慌てて体を退かせる。

彼女はほんのりと上気した顔を横へ振り向かせ、ぽつりと「行こう」と言つた。

「あ、ああ」

僕たちは、夜の繁華街を歩いていた。二人の間にはわずかに間隔があり、それはかつての僕達なら考えられないほどに大きく開いていた。

でも、それは心の隔たりがあるからではなく、逆に――。

僕はふと、あそこにしないか、とファミレスの看板を指差した。

早苗はすぐに、いいよ、と笑つてうなづく。

そうしてファミレスへと歩き出したところで、僕はふと、前方を歩く一人の女性に目が留まつた。

彼女の背中と、いつかあの夢で見た女性の背中とが重なつた。僕は、あ、とつぶやいて足を止める。

体が金縛りになつたように動かなくなり、目だけで女性の赤いコ

トの背中を追う。

「お兄ちゃん？」

長い黒髪が赤いコートの生地の上で踊る。

僕の唇が、母さん、とつぶやく。

すると、女性が横断歩道に入り、その横顔が見え、夢で見た女性の顔とはまったく違うことに気付いた。やっとのことで体の硬直が解ける。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

蒼白な顔を浮べた僕の肩を、早苗が心配げに揺する。

僕はわずかに息を切らしながら、早苗の顔を見下ろした。そして、弱弱しく言う。

「大丈夫だ」

そして、心配する早苗に腕を引かれながら、僕は横断歩道を渡ってファミレスへと向かった。

ファミレスに入ると、僕らは窓側の席についた。

オーダーを済ませると、ぼんやりと窓の外のきらめきを眺めていた。そこでふと、脳裏に女性の後ろ姿が閃いて、僕は唇を噛んだ。

「お兄ちゃん」

いつの間にか、早苗の顔が間近にあった。心配そうに顔をのぞきこんでくる。

僕は慌てて笑顔を浮かべ、

「別に、大丈夫」

とそう言う。しかし、

「隠さないでよ」

早苗は顔をむくれさせて、じつと睨んでくる。

「お兄ちゃん、何か思いつめた顔してるよ。悩みがあるのなら、私に言ってよ。ねえ」

早苗は体を乗り出し、僕に顔を差し迫らせる。その手が、僕の両手を包み込む。

「ねえ、お兄ちゃん」

懇願するような声に、僕は仕方なく一息を吐くと、あの夢のことを早苗に話す。

話し終わると、早苗は意を決したようにうなずき、

「会いに行こう」

そう言った。

会いに行くって誰に？　そうつぶやこうとして、僕は、まさか、と声を漏らした。

「そう。本当のお母さんに会いに行くんだよ」

早苗の言葉に、僕は啞然とする。

「私も、お父さんに会いに行く」

でも、と僕はつぶやきかける。早苗は僕の手には指を絡ませ、

「大丈夫。私がついてるから」
僕は彼女の顔をじっと見つめた後——ゆっくりと「わかったよ」
とうなずいた。

家に帰ると、僕は父さんと母さんに、その計画を打ち明けた。
彼らは一瞬黙り込んだ後、笑顔で「わかった」とうなずき、連絡
を取ってくれることを約束した。

僕は一週間後の日曜日、早苗は二週間目の火曜日に、再会する約
束を取り付けた。

僕は日曜日、とある喫茶店に早苗と足を運んだ。
奥の席に、その女性は座っていた。長い髪が特徴的な、見たところ
三十代前半くらいだった。

挨拶を交わし、向かいの席に座ると、その隣に早苗が座った。
二言三言交わした後で、ふと女性が机に置いてあったハンカチを
手に取り、目に当てた。

じっと顔を見つめると、間違いなくあの夢に出てきた女性だった。
一回り老けて見えるけれど、確かに彼女だ。

僕と女性はそのまま、ぽつりとぽつりと会話を続け、一時間後、
僕は席を立つことにした。

頭を下げる僕に、女性は再びハンカチを目に押し当て、また会い
ましょう、と言った。

そして僕は喫茶店を後にした。
「もつと話さなくて良かったの？」

早苗が背中を手を組みながらぽつりとつぶやく。
僕はふつと微笑み、

「……いいんだ。元気そうにしてるってことがわかっただけで」
妙に晴れ晴れとした気分でそう言う。

ふと、道の端に、屋台が並んでいることに気付いた。近寄ると、
鯛焼きを売っていたので、二つ買って早苗の元へ戻ってきた。

彼女に一つ渡して、ぱくりと鯛焼きにかぶりつく。

すると、早苗が白い包みを持ったまま、じっと地面に視線を落と
していることに気づいた。

「食べないのか？」

僕がそう聞くと、早苗は「うん、食べるよ」とつぶやいて、思案
気な顔のままぱくりと一口食べる。

「不安なのか？ 父さんに会ったのが」

僕はその横顔にぼつりとつぶやく。

「うん……。もう十六年が経ってるでしょ？ 父さん、何とも思っ
ていないかもしれない」

そう言って俯く早苗の肩に、僕はぼんと手を置き、

「大丈夫だよ。もしひどい親だったら、すぐに別れてしまえばいい」
そう言くと、早苗は心から安心したような表情を浮かべて、うん、
とうなずき、僕の手を握った。

一週間が経ち、再度、駅前の喫茶店に足を運んだ。

戸口で黒いスーツを着た男性が立っていて、僕は彼を一目見て、
早苗の父親だとわかった。早苗も同じだったようで、彼女は緊張し
たように、僕の腕を握ってくる。

近づく、父親は、目を見開いて早苗を直視し、僕たちの元へ駆
け寄ってきた。

「早苗？ 早苗なのか？」

父親のその言葉に、彼女は戸惑いながらもゆっくりとうなずく。
すると、父親は「ああ！」と感嘆の声を漏らして、その途端、彼
女を抱きしめた。

早苗はびっくりしたように目を見開き、父親の肩越しに僕を見つ
めてくる。

「……良かった、やっと会えた」

涙交じりに言う父親に、早苗の目にも薄く膜が張りつき、腕の中
があったかそうに、淡く微笑んだ。

早苗の父親は抱擁を解くと、僕の方に振り返り、

「君は……？」

と聞いてきた。

「佐藤和彦です」

と頭を下げる僕。

「ああ、和彦君か」

父親は僕の顔をじろじろと眺め、そして、ちらりと僕達の繋がれた手を見た。その瞬間、彼の眉が歪んだのを、僕は見逃さなかった。

「さあ、行こうか」

父親は、ずっと片手を伸ばし、僕と早苗の繋がれた手の間にそれを挟みこみ、切り離れた。そして、早苗の背中に手を当て、店に入るように促す。

店内に入り、テーブルにつくと、早々に父親は彼女に話しかけ始め、最初は彼女もどこか言葉少なだったが、時間が経つにつれ、いつものように明るい言葉をかけるようになった。

約束の二時間があつという間に経過し、早苗が笑顔で別れを告げて席を立つとしたその時、父親の手が早苗の腕をつかんだ。

「……早苗」

父親は真剣な目で、彼女の顔を見つめる。

「一緒に行こう」

その言葉に、早苗は一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに困惑の表情を浮かべ、

「私は……」

と言葉を濁す。

「あの家には帰らずに、私と共に行こう」

そう言つて、半ば強引に腕を引こうとする父親に、早苗は「痛いよ」と顔を歪めて、僕に助けを求めるように視線を向けてくる。

「あの、島崎さん」

父親が、ぎろりと僕を睨み据える。僕を罵るのをずっと我慢していたのだろつ、溜まっていた嫌悪の念が一気に噴き出したかのよう

な形相で、

「何だよ」

とつぶやいた。

「手を離してやってください」

父親は、今にもつかみかかってきそうな勢いで僕を睨んだが、娘の存在に気付いて、ばつが悪そうに視線を逸らす。

「父さん、やめて。お兄ちゃんに、そんな目を向けないで」

早苗は、必死に懇願するように、父親の手を握った。

その途端、父親の顔から怒りの形相が消え去った。代わりに、悲しそうな表情が浮かび、父親はすぐに、「すまない」と早苗の腕を離す。

僕たちは店を出て、別れ際、もう一度早苗の父親が、彼女を呼び止めた。

「もし嫌なことがあつたら、すぐに私の元へ来ていいからな」

すると、早苗は笑顔を浮かべ、

「大丈夫だよ、父さん」

そう言つてふと僕を見て、もう一度「本当に大丈夫だから」とつぶやいた。

僕は父親へと頭を下げ、早苗の腕を引いて歩き出した。

電車の車内は夕日色に染まり、僕と早苗はぼつんと座席の上で身を寄せて座っていた。

早苗の頭が僕の肩に乗せられ、彼女は眠いのか、どこかとうとうした目を地面へ向けていた。

そんな中、彼女の口が開かれる。

「お兄ちゃん」

僕は振り向き、

「何だ？」

優しくそうつぶやく。

「今日、父さんと会つて、どう思った？」

そう言つて、早苗は僕の顔をじつと見上げる。

斜め下に視線を下げ、「そうだな」と少し考え、

「早苗のことをよく想ってくれている、いいお父さんじゃないか」

「少しヒステリックだけどね」

そう言つてくすくす笑う早苗の頭に、僕は手を置いて、わしわしと撫でる。

「何？」

早苗はくすぐつたそうに目を細める。

「今日の早苗は、よく頑張つたよ。褒めてつかわす」

そう言つて、もみくちやに彼女の頭を撫で回す。早苗が悲鳴を上げて、「なりませぬ！」と叫ぶ。

僕は彼女の横顔を愛しげに見る。

僕は早苗が好きだ。だけど、それ以前に、彼女は妹だ。

僕のこの気持ちを早苗に伝えることは、これから一生、ないだろう。

それでいい。

本当は今この瞬間も、早苗を抱きしめてやりたくてたまらないけれど、それは早苗を一人の女性として想う気持ちだ。

だがもし、僕のこの気持ちが、抑えきることができないくらいに膨らんでしまったならば——その時は。

「お兄ちゃん……大好きだよ」

早苗がそう言つて、こてん、と肩に頭をもたせかけてくる。

——その時が来たならば、はつきりこの想いを早苗に伝えよう。

兄としてではなく、一人の男として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4895j/>

シスター ～僕は妹が好きだ～

2011年10月5日02時39分発行